

大分県の民俗芸能 (四)

染 矢 多 喜 男

13 杖・神踊

佐伯市黒沢

佐伯市黒沢に鎮座する富尾神社の祭礼に奉納される。祭礼は旧暦7月25日であったが、10年ほど前から新暦4月25日にかわった。昭和40年の祭には奉納されなかった。

演技者と装束

杖 (10名) 毛頭・鉢巻・上衣 (牡丹の花などを染めぬき、袖口は三角紋で縁取る)・帯・胸当 (上部には波頭紋、中心部に三ツ巴紋)・櫛 (端を長く背後へ垂らす)・手甲・タツツケ・白足袋・草鞋。杖は長さ5尺7寸で、両端に色紙房を付ける。長刀や木刀を使う者もいる。

踊手 (10数名)・歌手 (数名) 羽織・袴・黒足袋・草履・扇子。

笛 (数名)・鉦 (1名)・鼓 (1名) 袴・黒足袋・草履。

太鼓 (2名) 胸当を除く外は杖と同じ服装。締太鼓である。

演技の概要

堅田神楽の奉納が終ると、拝殿前の広場で踊と杖を2〜3番奉納する。終って御神幸の隊形に整列する。順序はサキバライ

(2名。中1名はカダン)・猿田彦・神宮旗・先乗騎馬(神宮)・神杖・獅子・前楽(笛・鼓・太鼓)・太刀・金幣・後楽(笛・鼓・太鼓)・神輿(四神の銚が神輿の前)・神宮・氏子総代(宮総代・区長・カダンなど)である。午前11時頃出発する。前楽がシラカタ、前楽がミチガクを奏しながら約2軒下る。御仮屋には12時頃到着する。行列を整理するために2名一組の取締が列に数組入る。取締には3名のカダンも参加する。

昭和18年の台風で芝居小屋が流失したので、御仮屋を芝居小屋にあて、御仮屋は仮設する。杖や踊は御仮屋の前に仮設するハリアゲの中で演技する。ハリアゲは縦7米・横5米・高さ5米で、縦に3本の柱を立て、天井に葎を張る。杖はウチとウケに別れてハリアゲの両側に整列する。まず獅子が注連縄を切つてニワイリ、続いて杖が拜をして一巡の後、ニワイリとゴホウを使う。終れば一側に並んで待機する。歌がイレハ、踊組がお伊勢とヒキハを踊る。ここで昼食をとる。午後は引続いて、杖(芝引)・歌(イレハ)・踊(名所)・歌(ヒキハ)・杖(腰車)・歌(イレハ)・踊(せめてめるめ)・歌(ヒキハ)・杖(初段)。杖・踊の後に10数年前までは地狂言をしていた。午後4時頃のオカエリの前に、踊を2番踊る。神社に着いた時に昔は1番踊っていたが、今は御神楽だけである。結局踊は祭の日に18番、翌日の午後1時頃の礼踊に3番踊る。杖も踊に合せて21番使うが、14番しかないのが同じものを2度使う。しかし、近年は祭の日に3番しかせず、礼踊に多く踊るようになった。

沿革など

富尾神社所蔵の宝暦9年の文書によれば、数年間不作が続いたために弘治3年に「夏祭七月廿五日、御浜出・踊・杖・狂言永代致様に御立願申上」げて始めた。しかし、「其以後年々御祭礼も不時に相成、諸芸も不致候処、天和元年七月廿五日副切たる晴天に俄に大水出来」したので、「前々の通り御祭礼来世に至まで諸芸も不時無之様可仕候との御立願」をして再興したという。しかし同社所蔵の天保十年に書写した「志卷之大事」という杖の由来書によれば、杖は元禄元年に関東之浪士荒木左馬助より伝授をうけたという。

宝曆九年頃には、祭日に神前で踊₃番と杖・還幸後に神社で踊₃番、翌日踊₁₂番と杖・狂言を演じていたから、都合24番踊っていたようである。当時は踊は2組に分れ、組毎に棟梁1名をおき、退役やシタナラシの時の不参などは棟梁に届出ることを規定している。

祭には宮座が形成されていたようで、現在シンモンとよぶ家が上組8戸・中組10戸・下組8戸、計26戸ある。シンモンは7月7日にコシギリ（神社の掃除）をし、祭礼の際は拝殿に上って神オトシに立合い、神輿を担ぐことになっている。神輿を担ぐので楽はできないが、杖・踊には参加する。また、踊・杖・狂言もそれぞれ組を構成して世襲して来たようである。総戸数81戸の中、杖組12戸・踊（笛・鉦・太鼓・歌）組44戸・狂言組17戸・無役25戸である。但し狂言は10数年前に廃絶したため、杖・踊や無役になっている。無役には新入りの家もかなりある。戸数からいえば芸能の中心は踊にあったようである。勿論各戸が世襲している芸能は祖先伝来とは限らないようで、宝曆9年の規定にも断われば役替えを認めることが記されている。

楽（笛・鉦・鼓・太鼓）・歌・踊は総称して踊組とか楽人という。山口家は踊組の伝統的な棟梁と考えられ、別個に棟梁2名をおく、棟梁には凡てに通じた人が選ばれた。任期は普通3年であるが、それ以上勤めた人もいる。年令には制限はないが、40才を過ぎてからなる。組員は後継者ができればヌケル（退く）が、勝手にヌケル人もでてきた。笛・太鼓・歌・踊など別々に練習するのを小ナラシ、合同練習を大ナラシという。大正時代にはナラシに欠席の場合は罰金制をとったが、罰をうける人はなかった。7月1日の願成の日がナラシの始めである。17～19日は3名いるカダンの家で踊る。カダンは副区長ともいべき役で、上・中・下の各組に1名ずついる。4月1日の初寄の時に選ぶ。20日は山口家、21・22日は組の棟梁の家で踊る。以上のナラシの時は各家の負担で御馳走を出す。杖組も7月1日からナラシを始め、16日以後は毎晩続けてナラシをする。23日はウチクミといって、杖・踊の合同練習をして仕上げる。24日のヨドはニワツクリ（御旅所の準備）をする。この日に杖組はフサ切りをする。ウチとウケの棟梁の家を年毎に交代する。この日はお通夜をし、夜食以後、祭日（25日）の昼までは煮炊

きしたものを一切食べない。ヒロモンダテ（ヒノモンダチ？）という。25日の朝は水の行事（川で身体と杖を清める）をし、前夜切ったフサをつける。朝食は果物ですます。

祭日を旧暦7月25日から新暦4月25日に変更したのは、夏は夕立があったり食物が腐ったりするからだという。

演 技（杖）

庭入り（杖）

左足を前に出して半身になり、左手は下げて、右手の杖を腋下に入れ、尖端を地面よりやややすかす。左より3人目は左手を杖に添え、右・左・右と前進する。右端の杖は右・左と出て、又旧位置に戻る。前進した杖は右足を引いて半身になり、前腕を直角に曲げ、杖を垂直にし、左手は腰に張る。列の杖も同様の姿勢をとる。3人目が大音でイイタテを奏上する。右膝を曲げ、左足を伸して背面を向く。正面に向きを変えながら、杖を右肩に担うようにして打下す。爪立ちして杖を頭上に高く差上げ杖を持ちかえて右足を引き、杖で地面を打ち、右足を曲げ、左足を伸して打下す。背面を向いて杖を左肩から打下し、右腕下に抱え込んで、隊列に戻り、正面を向く。全員杖の前に倒しながら、左膝を曲げて上体を倒し、右手を杖の元までずらして上体を起こす。右・左と前進し、右足を左足に揃える。正面に向けて両膝を張り、右腕下に杖を抱え込む。杖をを起こして、身体の前で斜めに左手で持つ。右手を前に下げて礼をする。右手を添えて杖を構える。杖を天地に廻して右手に持ち、右足を大きく引いて右膝を曲げる。左手で杖の下端を持ちながら、右足を左足に添え、左足を引きながら杖を構える。杖をを起こして正面に向き、左膝を曲げ、右足を引いて、杖を前下に構える。右足を左足に添えながら杖を立て、左足を引いて膝を曲げ、杖を打下す。左足を右足に揃え、右半身で両膝を張り、杖を構える。杖を胸の高さで水平にして立ちながら、杖を右肩から打下し、左足を引いて左膝を曲げる。左足を右足に揃えながら、杖を天地に廻して、右手で垂直に持つ。左足を出して半身になる。右足を引いて右膝を曲げる。右足を引き寄せて、甲を左足につけ、右足を戻す。左足を上げてまた踏み、杖を右肩から打下しな

がら、右足を前に出し、左・右・左・右と前進し、両足を踏張って、左側を向き、杖を右手に垂直に持つ。左・右・左・右で旧位置に戻り、右側を向いて、両足を踏張り、杖を右手に垂直に持つ、右足を左足に揃えて、正面に向く。

しよだん（薙刀・刀）

薙刀が右、木刀は左に並ぶ、薙刀を右手で小脇に抱え、木刀は右手に持ち、刀尖を前下にする。両者は向合う。木刀が左側に切込む、薙刀が左手で木刀を押える。木刀は右に向きながら薙刀に切込み、薙刀が受ける。薙刀が木刀を押し上げる。両者は左足を引いて下で切結び、また薙刀が木刀を押し上げる。両者は後退する。薙刀は直立し、木刀は屈んで八双に構える。薙刀が右足を踏んで木刀に迫る。木刀は跳んで左に構え、薙刀は後へ跳ぶ。両者は切結び薙刀が木刀を押し上げる。また下で切結び、頭上に押し上げる。薙刀が左から足を払うと木刀は跳躍し、右から払うとまた跳躍し、木刀が切込むのを薙刀は受ける。刀を頭上に構えると、薙刀が打込み、引いて薙刀を頭上にかざす。両者は旧位置に並び、薙刀・木刀共に右の小脇に構える。

まわり（薙刀・刀）

薙刀は左足、木刀は右足を前に出し、それぞれ右・左半身の姿勢をとる。薙刀が右・左で出て切込む。薙刀は受けて木刀をはね、足を払う。木刀は右足を引いて八双に構え、両者は下で切結ぶ。引いてまた下で切結ぶ。薙刀は一回転して下で切結ぶ。薙刀・木刀を廻してまた下で切結ぶ。薙刀は後へ引いて立ち、木刀は屈んで八双に構える。薙刀は切込んで木刀を打落す。木刀は前に踏んで木刀を拾って切結ぶ。薙刀は木刀を頭上に押し上げ、また下で切結んで頭上に押し上げる。離れて、両者とも反対側に切込む。薙刀は回してまた切込み、反転して木刀に切込む。両者は引き、旧位置に戻って並ぶ。右足を引き、右膝を曲げ、薙刀・木刀を小脇に構える。

うわぶり（薙刀・刀）

薙刀が右、木刀は左に並ぶ。両者とも右足を引き、右膝を曲げ、薙刀・木刀を右に構える。右・左・右と斜前方（薙刀は右、木刀は左）へ進み、向合う。上体を屈め、上体を起しながら共に右足を引いて右半身になり、薙刀は右手に垂直に持ち、木刀は八双に構える。右足を左足に揃え、左足を引いて薙刀と木刀を交える。すり上げて、左足を右足に揃えて直立しながら、薙刀・木刀を引き、左足を引いて薙刀と木刀を交える。すり上げて薙刀・木刀を引く。薙刀が上段より切込んで一回転し、低く水平に構える。木刀は八双の構から大上段にして打込む。薙刀は水平にした柄で受ける。木刀は大上段から右脚へ打込むのを薙刀は垂直にして受ける。木刀が同じ要領で左脚へ打込むのを薙刀が受ける。両者は引いて薙刀は右手に垂直に持ち、木刀は八双に構える。木刀が跳んで大上段から打込むのを薙刀が受ける。木刀は引いて八双に構え、薙刀は右足前、左足後の左八双に構える。薙刀は左足を右足に揃え、右足を引いて中段に構える。薙刀を手元に手繰って回す。両者上体を屈めて旧位置に向き、右・左・右と進んで旧位置に戻る。

とだのうら（杖）

左足を前に出し、上体を倒して右手の杖を前方へ倒す。上体を起して杖を右脇に抱え込む。中央の二名が右・左・右と斜前方（右が右へ、左が左へ）へ進む。左・右の二名宛向合って構える。左足前・右足後の右半身で、右脇の杖は垂直。右足の甲を左足へつけ、また後へ引く。杖を八双に構える。右足を前へ踏み出して、杖を上で交叉し、右足を後へ引いて八双に構える。再び同じ動作をして、右半身・杖垂直の姿勢をとる。左杖が前に跳んで左脚へ打込むと、右杖は左足を引き、右足を前に踏んで、杖を垂直にして受ける。左杖は杖を手繰って、右脚へ打込む。右杖は杖を右に移して受ける。右杖は右から上へ杖を押し上げる。左杖は背後へ向いて右足を踏み出し、八双に構える。右杖は左足を右足に揃え、右足を引いて中段に構える。右

杖は杖を手繰って上段に構える。四名とも旧位置に方向を変え、中二名が右・左・右で旧位置に戻る。

がんつぶし（杖）

同要領で中二名が位置につき構える。左足前・右足後の右半身で、右脇の杖は垂直。右足の甲を左足へ付け、また後へ引き旧姿勢に戻る。右足の甲を左足へつけ、また後へ引き、左手で杖の上端部を持つ。右足を前へ踏み、下で杖を交叉する。足を踏みかえ、左杖が打込むと、右杖も足をかえ、杖を水平にして受ける。左杖は杖を回し、足をかえ、屈んで杖を繰り出す。右杖も足をかえ、杖を体の右前面に垂直に立てて防ぐ。左杖は足をかえて打込む。右杖も足をかえ、杖を水平にして受ける。左杖は右足を後へ引いて、右八双に構える。右杖は足をかえて中段に構える。右杖は杖を手繰って上段に構える。四名とも旧位置に方向をかえ、中二名が右・左・右で旧位置に戻る。

ふりもどし（杖）

同要領で中二名が位置につき構える。右半身で右手の杖は垂直。右足の甲を左足へつけ、また後へ引き、八双に構える。右足を左足に揃えながら右手を下へ回し、左足を引いて中段に構える。杖を回しながら、左足を右足に揃えて直立し、右足を引いて中段に構える。右杖は杖を後方へ引いて体重を右足にかける。右手を上へ回し、杖をひねって一回転し、左足前・右足後で大きく踏張り、両腕を下げて杖を水平に構える。左杖が八双の構から打込むと、跳んで足をかえ、体の前面に杖を水平にして受ける。四名は杖を回しながら跳んで足をかえ、体の前面に杖を立てて構える。跳んで足をかえ、杖を下で交叉する。左足を出し、右右足を引き、杖を右で垂直に構える。左杖が八双から打込むと、右杖は跳んで足をかえ、斜めに受ける。左杖は八双に構え、右杖は杖を引きながら足をかえ、中段に構える。右足の甲を左足につけ、また右足を戻しながら杖を天地に回す。四名とも旧位置に方向をかえ、中二名が右・左・右で旧位置に戻る。

すねくだき(杖)

同要領で中二名が位置について構える。右杖は右半身で、右手の杖は垂直。左杖は右膝を張り左足を伸して、右手の杖は垂直。四名とも右足を左足に揃えて立つ。左・右と前進して、二名宛杖を前で揃えて行合い、位置をかわって構える。四名とも右半身で、右手の杖は垂直。跳んで足をかえ、右杖が杖を下へ打込み、左杖は垂直に立てて受ける。左杖が打込んでくるのを右杖は右斜下で受ける。右杖は左足を右足に揃えて立ち、左足を前に踏み杖を回して、左杖に打込む。右足を左足に揃えて立ち、杖を回して、二名宛並んで屈み、杖を交叉する。立ちながら旧位置に向き、中二名は前にいる杖のそれぞれ右側に入る。

かさはずし(杖)

同要領で中二名が位置について構える。右半身で右手の杖は垂直。右足を左足につけ、また後へ引く。右半身で杖の前端を左手で、中程を右手で持つ。大きく右足を前に踏み、杖を下で交叉する。交叉したまま上にすり上げ、左足を前に出して右足を揃え、杖を立てて揃える。杖を水平に揃えたまま、両手を中心に寄せ、また開く。杖を垂直に立てたまま背中を合せ、杖を水平にして両手を寄せ、また開く。杖を立てて共に中に向合い、右足を引き、杖を上で交叉する。跳んで足をかえ、下で杖を交叉する。左足を前に出し、右足を前に出し、右足をける。右足を後へ引いて構える。右半身で右手の杖は垂直。右足を大きく前に踏み、左杖が打込むのを右杖は右上で受ける。右杖は足をかえて中段に構え、左杖は八双に構える。右杖は杖を回しながら、右足を左足につけ、また後へ戻し、上段に構える。四名とも旧位置に向き、中二名が旧位置に戻る。

しばひき(杖)

同要領で中二名が位置について構える。右半身で、右手の杖は垂直。右足を左足につけ、また後へ戻して構える。右半身で

左手は杖の上端、右手は中程を持つ。跳んで足をかえ、杖を下で交叉する。左足を出し、蹴った右足を後へ引く、右半身で杖は垂直に構える。跳んで足をかえ、左杖が打込むのを右杖は右上で受ける。右杖は身体を後へ引く。左杖は右足を後へ引いて、八双に構える。右杖は左足を右足に揃えて立ち、右足を引いて中段に構える。杖を回しながら右足を左足につけて後へ戻し、上段に構える。四名とも旧位置に向き、中二名が旧位置へ戻る。

たちもぎ（杖・刀）

杖が右、木刀は左に位置し、向合って構える。右半身で杖は右脇。右・左・右で斜前方（杖は右・木刀は左）へ進み、向合って構える。杖は右半身で杖を垂直。木刀は八双。二名とも右足を左足につけ、後へ戻す。右足を大きく前に踏み、上方で切結ぶ。右足を引いて構の姿勢に戻る。左足を右足へ揃え、右足を大きく前に踏み、下方で切結ぶ。木刀が杖の先端を掴む。右足を少し引いて屈む。杖の両端を二名で持ったまま差上げ、木刀が杖の中段に打込む。両名は立ち、木刀が右足を前に出して切込むのを、杖は避けて木刀の右腕を掴む。杖がねじふせると木刀は一転回する。その間に杖は両者の間に落ち、杖が木刀を取る。木刀は無手で屈む。杖が木刀で大上段から切込む。木刀は屈んだまま跳び、杖は後退して旧位置に向き、木刀は杖を拾って右側に並び、旧位置に戻る。

きんかずき（杖）

杖と同要領で、右・左・右で斜前方へ進み、向合って構える。右半身で杖は垂直。右足を左足につけて戻し、八双に構える。右足を前に出し、杖を上で交叉する。両者とも杖を引き、右杖は右足を戻して踏張り、杖を右上・左下で背にする。左杖は右足を大きく引き、杖を右上・左下で背にする。右・左・右・左で前進し、右杖の股下に入る。右杖は左杖の上で一転回する。両者は左膝を立て右足を後へ伸して、杖を前で交叉する。二名とも跳んで足をかえ、杖を下で交叉する。跳んで上で交叉

する。跳んで下で交叉し、右足を引いて右半身に構える。杖は垂直に持つ。右杖が跳んで打込むと、左杖も跳んで、杖を水平にして右上で受ける。二名とも跳んで足を変え、右杖は八双、左杖は中段に構える。左杖は杖を回しながら、右足を左足につけて戻す。左足を軸にして正面に向き、上体を倒して杖を右脇に抱く、右杖を正面に向き、同じ姿勢をとる。

富尾権現神踊歌

いは

○天の岩戸のその初め、隠れし神を出さんと八百万の神遊、これぞ神楽の初めなり。これぞ神楽の初めなり。

○松の隙より海面を見れば、霧に混わる淡路の島より、漕ぎ来る舟は面白やふな人。

○たかす通いは物凄や沖の鷗と波の打つ音、夜明けの鐘は物凄やふな人。

○此処は住吉のお前で御座る。いざや人々宮巡りを始めて、神をも涼しめ宮参りしようふな人。

○偲ぶその夜は雨ならいと、お山の、イヤ、露は雨まさり。

○鳥が鳴けばもういと仰言る、月夜の、イヤ、鳥は何時も鳴く。

○簑着て通い笠着て通い、小笹の、イヤ、露は雨まさり。

○十七・八は木綿の袴、みにしととつきやいと。

○りんちょうじ別れて匂有る人に別れて、面白や何時までもお泊り、朝の道急ぎ給え候。

○彼の山見さえこの山見さえ、いただきつれたおはらぎを。

一番 お伊勢踊り

○イヤ、お伊勢踊りは踊り踊りてなぐさみぬれば、イヤ、国も豊かに千代も栄ゆる日出度さや。イヤ、東は関東奥までも、東

は関東奥までも。老若男女おしなべて、参り下向の目出度さや。イヤ、榊小枝にしできりかけて、イヤ、お伊勢踊りの目出度さや。

○イヤ、お伊勢踊りは踊り踊りてなぐさみぬれば、イヤ、国も豊かに千代も栄ゆる目出度さや。イヤ、西は住吉天王寺、西は住吉天王寺。四国筑紫の人までも、参り下向の目出度さや。イヤ、榊小枝にしできりかけて、イヤ、お伊勢踊りの目出度さや。

○イヤ、お伊勢踊りは踊り踊りてなぐさみぬれば、イヤ、国も豊かに千代も栄ゆる目出度さや。イヤ、南は紀州三熊野の、南は紀州三熊野の。ちさとの末の人までも、参り下向の目出度さや。イヤ、榊小枝にしできりかけて、イヤ、お伊勢踊りの目出度さや。

○イヤ、お伊勢踊りは踊り踊りてなぐさみぬれば、イヤ、国も豊かに千代も栄ゆる目出度さや。イヤ、北は越前能登や加賀、北は越前能登や加賀。越後信濃の人までも、参り下向の目出度さや、イヤ、榊小枝にしできりかけて、イヤ、お伊勢踊りの目出度さや。

二番 籠踊り

○ハイヤ、籠召せ籠召せ鳥籠を、籠召せ籠召せ鳥籠を。ハイヤ、やまがらの籠の内でのうらみごと、ハイヤ、籠が小籠での、さて遊ばれん。

○ハイヤ、籠召せ籠召せ鳥籠を、籠召籠召せ鳥籠を。ハイヤ、武蔵野の草の葉の数思えども、ハイヤ、縁が薄いかのー、さてそいせん。

○ハイヤ、籠召せ籠召せ鳥籠を。籠召せ籠召せ鳥籠を。ハイヤ、七尾七瀬の砂の数ほど思えども。ハイヤ、君に添わねばのー

さて清くもなや。

三番 ふたみち

○ハイヤ、ふたみちかけじゃ我がなかを、ふたみちかけじゃ我がなかを、ハイヤ、想えども君は想わん振りを召す。ハイヤ、心ばかりで歎かるる、心ばかりで歎かるる。

○ハイヤ、ふたみちかけじゃ我がなかを、ふたみちかけじゃ我がなかを。ハイヤ、糸薄引かば靡けよ糸薄。ハイヤ、枯穂になりてはいらぬ身を。枯穂になりてはいらぬ身を。

○ハイヤ、ふたみちかけじゃ我がなかを。ふたみちかけじゃ我がなかを。ハイヤ、秋鹿が恋に焦がれて野に出でて。ハイヤ、妻呼ぶ声は味気なや。妻呼ぶ声は味気なや。

四番 隴月夜

○ハイヤ、隴月夜は山の端に、隴月夜は山の端に、ハ、たが情ぞむらさみ。

○ハイヤ、萩やくのきりきく菊の花、萩やくのきりきく菊の花、ハ、およびなければみたばかり。

○ハイヤ、とどろとどろと鳴る神は、とどろとどろと鳴る神は、ハ、おとはくわばらよも落ちん。

五番 名所

○イヤ、名所踊りを踊るよハ、踊るよ。イヤ、春雨の、春雨の、晴れ行く今朝を眺むれば、淋しかるらん春は来にけり。あら面白の名所や。

○イヤ、名所踊りを踊るよ。ハ、踊るよ。イヤ、逢坂の、逢坂の、関の戸さしの音はかない、音に科無や音に科無や。あら

面白の、ハー名所や。

○イヤ、名所踊りを踊るよ。ハー踊るよ。イヤ、三井寺の、三井寺の、鐘の響に目が覚めて、鐘に科無や鐘に科無や。あら面白の名所や。

六番 鞠の踊り

○ハイヤ、春は桜のその下で、桜まさりの鞠遊び。ハイヤ、おいてはおつねそうらんや。鞠の遊びの面白や。
 ○ハイヤ、夏は柳のその下で、柳まさりの鞠遊び、ハイヤ、おいてはおつねそうらんや。鞠の遊びの面白や。
 ○ハイヤ、秋は紅葉のその下で、紅葉まさりの鞠遊び。ハイヤ、おいてはおつねそうらんや、鞠の遊びの面白や。
 ○ハイヤ、冬は霰のその下で、霰まさりの鞠遊び。ハイヤ、おいてはおつねそうらんや。鞠の遊びの面白や。

七番 せめてみるめ

○ハイヤ、せめてみるめをうらうらと、せめてみるめをうらうらと。ハイヤ、情無や我に心をおく人見れば、よそにうちとけてうらみ葛葉のきりぎりす。ハイヤ、うらみ葛葉のきりぎりす。
 ○ハイヤ、せめて見る目をうらうらと、せめて見る目をうらうらと。ハイヤ、想うこと色に見せまい紅のよ所に散りては靡かせん。我が身一つは如何にせん。
 ○ハイヤ、我が身一つは如何にせん。ハイヤ、せめて見る目をうらうらと、せめて見る目をうらうらと。ハイヤ、情無や顔と目元は桜花、振りと形は青柳の、うらみ葛葉のきりぎりす。ハイヤ、うらみ葛葉のきりぎりす。

八番 庄屋小屋

○ハイヤハ、しょうやなごやと思えども。しょうやなごやと思えども。ハソレ、味気無やむつがなる、イヤ、そう言つて叶うが恋の道。

○ハイヤ、短か夜は只恨めしや、短か夜は只恨めしや。ハソレ、語るまもなや味気なの夜や。イヤ、そう言うて叶うが恋の道
○ハイヤハ、比翼連理と思えども。比翼連理と思えども。ハソレ、明日の別れをかねて思えば。イヤ、そう言うて叶うが恋の道。

九番 忍べづく

○ハイヤ、忍べど逢はんその夜の口惜し。忍べど逢はんその夜の口惜し。ハイヤ、書きやる文もただいたづらに。書きやる文もただいたづらに。

○ハイヤ、十七・八はその山のつつじ。十七・八はその山のつつじ。ハイヤ、寝いろとすれば揺り起さるる。

○ハイヤ、武蔵のうわばらの一本薄、武蔵のうわばらの一本薄。ハイヤ、何時穗に出でて乱れたかの。何時穗に出でて乱れたかの。

十番 葛の裏葉

○ハイヤハ、葛の裏葉か我が恋は。葛の裏葉か我が恋は。ハイヤハ、うろめてとやる玉章ははらほろほろはらといづる。ハイヤ、誰が情ぞおむろさみ。

○ハイヤハ、他人の嫁御になる人は。他人の嫁御になる人は。ハイヤハ、とればなのたつ玉章ははらほろほろはらといづる。

ハイヤハ、誰が情ぞおむろさみ。

○ハイヤハ、狭い小路に踏み入りて。狭い小路に踏み入りて。ハイヤハ、とらぬものじゃよ玉章は、はらほろほろはらといづる。ハイヤハ、誰が情ぞおむろさみ。

十一番 りんばこ

○イヤ、思う方より、イヤ、りんばこをえたが、イヤ、みより蓋よりかけごより、なかのー、イヤ、ぢんよりそのみや大事え、よしやしろりしやおのー。

○イヤ、思う君様を、イヤ、そのおさとでみれば、イヤ、つれなえ、よしやしろりしやおのー。

○イヤ何処にねよか、あの山中に妻を、イヤ、しぎぬにたださ、イヤ、まえろえ、よしやしろりしやおのー。

○イヤ、吝気召すならただすてよすてよ、弓に張替え駒に、イヤ、のうかえ、よしやしろりしやおのー。

十二番 たちはならび

○ハイヤハ、たちは並べど物が言われん。ハイヤハ、富士や浅間の煙と共に。ハイヤハ、せにふして帰る明日は袖紋る。せにふして帰る明日は袖紋る。

○ハイヤハ、たちは並べど物が言われん。ハイヤハ、摂津の国の浪速津共に。ハイヤハ、せにふして、ハイヤ、帰る明日は袖紋る。せにふして帰る明日は袖紋る。

○ハイヤハ、たちは並べど物が言われん。ハイヤハ、富士や浅間の煙と共に。ハイヤハ、せにふして帰る明日は袖紋る。せにふして帰る明日は袖紋る。

十三番 高 砂

○高砂の松の春風も吹き暮れて、尾の上の鐘も響くなりけり。ハイヤ、落葉衣の袖添えて、木陰の塵を搔こよ。落葉や搔ぎ候
○ハイヤ、高砂の尾の上の鐘も昔すなりけり。眺かけて霜やおこらん。ハイヤ、落葉衣の袖添えて、木陰の塵を搔こよ。落葉
や搔ぎ候。

○ハイヤ、高砂のこの浦舟に帆を上げて、月諸共に出づるなりけり。ハイヤ、落葉衣の袖添えて、木陰の塵を搔こよ。落葉や
搔ぎ候。

十四番 ほのぼの

○ハイヤ、ほのぼのと、ほのぼのと、ハイヤ、明石が浦の朝霧に、君も棹寄らす我もおりす。ハイヤハ、それは情のすりぎ
りか。

○ハイヤ、伊勢の国、伊勢の国、ハイヤ、吹き来る嵐あきしくて、イヤ、君も棹よらす我も棹よらす。我もおりす。

○ハイヤ、西の国、西の国。ハイヤ、吹き来る嵐あきしくて、イヤ、君も棹寄らす我もおりす。ハイヤハ、それは情のすり
ぎりか。

十五番 龍 田

○ハイヤ、恋は竜田の薄紅葉、ハイヤハ、紅に心を染めて世を偲びしが、君は情無や情無や、寝ても覚めても忘れん。ハイ
ヤハ、寝ても覚めても忘れん。

○ハイヤ、恋は竜田の薄紅葉、恋は竜田の薄紅葉、ハイヤハ、足曳の山に我が身を捨つるとも、君が情の深きこそ、落つる涙

もせきあえぬ。落つる涙もせきあえぬ。

○ハイヤ、恋は竜田の薄紅葉、恋は竜田の薄紅葉、ハイヤハ、朝顔の花の露ほど添いはせて、立ちし我が名は駿河なる、富士の山よりなお高い。富士の山よりなお高い。

十六番 花夜に吹け

○花夜に吹けば風も色あり。花夜に吹けば風も色あり。ハイヤハ、君のあたりの大雨ならば、袖に降るとも袖は濡るとも辛からじ。ハイヤハ、袖に降るとも辛からじ。

○ハイヤハ、花夜に吹けば風も色あり。花夜に吹けば風も色あり。ハイヤハ、君のあたりの大雨ならば、花に吹くとも花は散るとも辛からじ、ハイヤハ、花に吹くとも花は散るとも辛からじ。

○ハイヤハ、花夜に吹けば風も色あり。花夜に吹けば風も色あり。ハイヤハ、踏みも散らさでただ忍ぶ。ハイヤハ、忍び得たとておよるなよ。我も大事の身を忍ぶ。我も大事の身を忍ぶ。

十七番 きぬぎぬ

○ハイヤ、きぬぎぬ鳴く夜の虫の声々は。きぬぎぬ鳴く夜の虫の声々は、ハイヤ、暮るれば君を待つ虫の声。ハイヤハ、添わで帰るか逢いもせて。

○ハイヤ、きぬぎぬなく夜の虫の声々は。きぬぎぬ鳴く夜の虫の声々は、ハイヤ、あわびの貝の片想いして、ハイヤハ、添わで帰ろうか逢いもせて。

○ハイヤ、きぬぎぬ思え我がために。きぬぎぬ思え我がために。ハイヤ、暮るれば君を待つ虫の声。ハイヤハ、添わで帰ろうか逢いもせて。

十八番 鈴 鹿

○ハイヤハ、此処は鈴鹿の宮川か、此処は鈴鹿の宮川か。ハ、身をも清めていざ参る。ハ、今は神代や有難や。ハ、今は神代や有難や。

○ハイヤハ、伊勢のようなの巫女達の、ハイヤハ、伊勢のようなの巫女達の。ハ、鈴や神楽を舞い上ぐる。ハ、鈴や神楽を舞い上ぐる。ハ、今は神代や面白や。ハ、今は神代や面白や。

○ハイヤハ、天の岩戸の御戸開く、天の岩戸の御戸開く。ハ、日本輝く有難や、ハ、日本輝く有難や。ハ、今は神代や有難や、ハ、今は神代や有難や。

ひきは（歌の終りに付けて歌う）

○イヤ、権現の、権現の、お前の松は千代の松、枝さしまさり陰で遊ばん。イヤ、陰で遊ばん。

○イヤ、世の中は、世の中は、ようやの闇となり。時通わぬきろく天の岩戸を、イヤ、天の岩戸を。

○ハイヤ、沖のとながで櫓がたれて、櫓ではやらいで歌でやる。歌でやるのううき人。

○ハイヤ、何を歎くか川柳。ヤ、水ではなを歎き候。面白やのううき人。

○ハイヤ、とても籠らば清水に。ヤ、花の都を見下して。面白やのううき人。

○愛宕参りに袖を引かれたも。是も愛宕の御利生哉。面白やのううき人。

○イヤ、文をしゃん投げたは、いとしなおいとし。お文いとしさは駿河なる、イヤ富士の山ほど山ほど。

○イヤ、弓矢八幡身に添い候に、うかるつか夢か。あんろしょうだいらしやの人の心をうからかす。

富尾大権現由来記

抑当社御本山定光寺富尾三社大権現之由来ヲ尋ニ、祖母嶽大明神二十一代孫ナリ。佐伯薩摩守大神朝臣惟治公者鷓草葦不
合尊之御母公豊玉姬ナリ。豊後ト日向トノ境ニ鎮座ス。神威嚴然タリ。古伝記。人王一百六代後奈良院大永七亥十一月廿一日
佐伯薩摩守惟治公母牟礼之域発キ、竊ニ日州エ赴カント計ル所、敵軍公之行先ニ立塞事急ニ及テ、惟治公御自殺有テ族滅ス。
是何日哉。然ニ公ニ敵盡悉ク滅亡ス。其後多田元祖若狭ト云ル女ニ不思議成ル告有テ、黒沢村内我霊ヲ祭り、清浄之地遷定テ
鳥居ヲ立、産神ト崇敬テ当村之惣廟ト祭良者、行末村繁昌五穀豊熟病難消除ニ可守護。若於疑ニ子々孫々ニ至ル迄村郷退転可
寿トノ御託有テ、若狭絶死シテ惣身ヨリ汗ヲ出、三日間無人心前後無知事。生氣成テ尋ニ是覺事ナシ。不思議之始也。数年五
穀不熟疫癘無去事。村難立災難多ク、別而長谷河内谷口毎夜ニ大鳴音ニ飛驚。翌朝見ルニ何事ナシ。左様成事間々多ク終ニ住居
難成。依而清浄之地ヲ選而社造鳥居立。冬霜月廿五日夏七月廿五日祭日ト定、御浜出・踊・杖・狂言永代無懈怠相勤ベク、祈
願ニ依而五穀豊熟病難退治穩ニシテ村繁昌也。其比御浜出之場所ハ前ノ川原・岡ノ下・瀬口下所々定リカタク、天和年中三・
四年致中絶。七月廿五日俄ニ大ニ赤水、村中打驚キ、近年氏神御浜出可大切相勤、御立願不時此知セニ無間違。猶如何程成災
難出来候事モ難斗。依之川越ニ問合セ、産子惣代トシテ甲斐氏九郎右衛門元祖神主方エ川越ニ申伝候ハ、御祭礼定日晴天ニ大
水、御浜出中絶之告成ル事ニテ、惣氏子申候ハ末世ニ至迄、御浜出・踊・杖・狂言黒沢在ラン限り可相勤。右ニ依而神主甚太
夫神前ニ御立願申上候処、無程数日テ皆々奇異思ヲナシテ、右之聞伝ハ多田別家伝兵衛七十有二歳成ル春、代即孫兵衛拾有六
才之時間伝置ハ、行末ノ事ヲ考、宝曆九年之春書誌シ置ハ、末世ニ至ル迄無懈怠御願成就大切ニ可仕也。
御願成就定日七月廿五日、御本宮ニテ御神前踊三番杖相勤、旅所御殿踊六番・杖・狂言、御還幸アツテ御本宮ニテ躍三番。
廿六日踊拾二番・杖・狂言可相勤事。

踊躍練梁阿組ヨリ老人宛拵置、何役ニテモ可受指図。若不受指図輩ハ組役人エ可申出候事。

歳罷寄躍・杖・狂言共ニ勤成候者棟梁エ申出退役可仕候。又退役仕候共息災ニ候者○二者無不參立合、身若ノ者可致指南事

何役ニテモ致退役候ハ棟梁ニ相断可致退役。猶又致役替度候者棟梁ニ相断可申事。

下鼓草節病氣又ハ御役目等ニ罷出候者棟梁ニ相断可申候事。我儘ニ下鼓草之場所ニモ不立合數度不參輩ハ、棟梁ヨリ急度致吟味、兩組役人エ断、相談之上御願成就切錢割掛申間敷候事。

無役面々タリ共鼓草場所ニハ無不参立合可申、若不参之輩制スル時ハ役付全前可為事。

右之御立願於御神前申上置候。年々七月廿五日御祭礼御浜出無懈怠大切相勤可申候。依而神文如件。